

「さばえ近松文学賞 講評」 審査委員長 林 哲治

忍ぶ恋、おしどり夫婦の恋等、さまざまな男女の恋の話が描かれていました。それぞれの時代を彷彿とさせる描写力、読み手を引きつける構成、書き出しと結びの短編としての簡潔性、ムダな表現は、見受けられず、どの作品も力作ぞろいでありました。短編としての完成度を評価対象としました。また、鯖江に関わる言葉、例えば「眼鏡」や「漆器」等の言葉も、作品とうまく解け合い、新たな地域発見の作品にもなっていました。

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲などの編集は加えておりません。

「恋の手本」

徳山 容子

私は床を磨く。渾身の力を込めて、汗だくになって一心不乱に床を磨く。窮地に立たされ、もうあとがない。もはやこれまでとなったとき、人は突飛な行動に出ることがある。それが私の場合、ひたすら床を磨くことだと知ったのは二十五歳の夏だった。

恋人の心変わりを知り、自分の馬鹿さ加減を呪った。飲み込むことも吐き出すこともできない大きな鉛の塊がのどもとに重く巢食い、苦しくて息ができなくなりそうだったそのとき、私は何故か床を磨き始めたのだ。一人暮らしのアパートの、床という床すべてを隅から隅まで磨かれたように磨き上げる。それは、自分でも不可解で滑稽な習性だった。

「なんだ、こんな夜中に掃除か？」

ふいにドアが開き、訪ねてきたのは晴彦だった。連絡をしないでいきなり来るのは止めてくれと何度も言っているのに、彼はたびたびやって来た。まるで我が家に帰るように。

そんなわけで晴彦だけは、私のおかしな習性を知っている。

そしてその、襦にも似た雑巾がけを私はこの五年の間に四回ほど繰り返している。不思議なことに、私が自分を苛むように雑巾を握る夜には必ず晴彦が現れた。そして気づくと一緒にあって床を這いつくばり、何も言わずに面積の何割かを負担するのだった。

五か月ほど前の、梅雨入り宣言が出されたばかりの蒸し暑いあの夜も、やっぱりそうだった。例によっていきなりやって来た晴彦は、フローリングの汚れを睨みつけて黙々と手を動かす私を見ると「やれやれ」と言って上着を脱いだ。

「あんたはやらなくていいのよ」

「早くビールが飲みたいだけだよ」

晴彦はテーブルの上に置いたコンビニの袋を顎で指しながら言った。

降矢晴彦の実家と私のそれは、長野県のへんぴな田舎町の、県道を挟んだ筋向かいにあった。親戚関係でもないのに私の名字も同じ『降矢』なのは、集落一帯が『降矢』姓だからなのだけれど、東京に出てきてから知り合った友人たちには、ときどき出沒するこの幼馴染みを私の兄だと勘違いされることも多い。大手信販会社の浜松営業所に勤める晴彦は、東京本社への出張が頻繁だったので、仕事帰りに落ち合って一緒に食事をすることもあった。そんなとき、私の女友だちが同席することも彼はいとわなかった。

実際のところ、ひとつ違いの私たちは本当の兄妹のように育った。子どもの頃はそれぞれの兄弟姉妹とともに毎日のように一緒にお風呂に入っていたし、互いの家に泊まり合ったりもし

た。さらに嘘か真か、母乳の出が悪かった母よりも、私は晴彦の母親のおっぱいを飲んで育ったという逸話があるくらいなのだ。兄弟と思われても何の支障もなかったし、東京出張のたびに「ビジネスホテルは嫌いだ」という理由で私の部屋に泊まっていく晴彦は、兄ということにしておくほうが面倒がなかった。

何故、床磨きに執心するのは自分でも説明し難かったが、鏡のようにピカピカになった床の上でビールを飲む頃には、私の気持ちはひととおり収まるところに収まっていた。大切な何かを手放すことを覚悟する。そのための儀式なのかもしれないと思っていた。

「長う細う、可愛がってくださいませ」

三本目の缶ビールを手の中でもあそびながら、独りごちたら自分が可哀想で笑えた。プロ野球のダイジェストを食い入るように見ていた晴彦は、テレビ画面から目を離さずに「なんだ、それ」と言った。

私は大学二年生のとき、近世文学の講義で近松門左衛門に出会った。彼は当時の人気脚本家で、近松作品はいわゆるトレンドイ・ドラマの台本なのだと解釈した。研修という名目で、たった一回だけ観に行った人形浄瑠璃に心から感銘を受けた記憶はないのだけれど、この台詞だけは『可愛い女』を象徴する言葉として私の中に残っていた。『曾根崎心中』の一説、遊女お初の台詞だった。

「いつもそういう気持ちでつきあい始めるんだけどな。なんでこうなるかな」

「ラブミー リトル、ラブミー ロング」

「え？」

「少し愛して、長く愛して。英文のことわざだよ。同じような意味だろう」

立ち上がって、ハンガーラックに掛けた背広の内ポケットから携帯を取り出す晴彦はＴシャツにトランクスという格好だ。改めて眺めれば、つくづくおかしな光景だと思ふ。父親でも兄弟でも、そして恋人でもない男が下着姿で部屋にいる。

「人が、ひとつの恋愛に対して用意できるエネルギーは限られているらしいよ。一気に使えばあつという間に終わる。結婚したかったら、小出しにして長持ちさせろってことだ」
そういうもってもらいたいことを言うのは、服を着てからにしてほしい。

夏の気配が色濃く残る九月の中旬、私は後輩の結婚式に招かれ、職場の同僚たちと横浜のホテルにいた。後輩たちの寿退社に焦りを感じていたのは少し前までのこと。今はただ淡々と、仕事の延長のようなつもりで出席していたし、その都度新しいドレスを用意することもなくなった。

「ねえ、ここのホテルのティ・ラウンジってミルフィーユが有名なんだよね」

「あ、知ってる。テレビでやってた」

披露宴のあと、二次会まで出る義理はないということで見解の一致をみた同僚たちとお茶を

飲んでいくことにした。そこで私は、とても意外なものに出くわしてしまったのだ。

窓際のテーブルに晴彦がいた。差し向かいにきれいな女の人が出て、二人は親しげに笑顔で話をしていた。私の部屋にいるときのオヤジのような彼とはまるで別人の、よそ行き顔の晴彦だ。私は晴彦があんなふうになんか笑うことを知らなかったし、あんなふうになんか目を見ながら相手の話を聞くのを見たことがなかった。はにかみながら楽しそうに話をしているのは、華やいだ色のワンピースが似合う可憐な人。私よりも五つくらい若いだろうか。見とれていると、晴彦が私に気づいた。その視線をたどって、彼女もこちらを見た。私はまるで悪戯を咎められた子どものように、ただ視線を逸らし、自分の心臓の音に怯えていた。

その日部屋に戻った私は、固く絞った雑巾で床を磨いた。出くわした意外なものとは、よそ行き顔の晴彦ではない。自分の中の嫉妬という感情だった。そんなはずはない、これは何かの間違いだ。どんなに打ち消そうとしても、心に灰色の雲が立ちこめる。

今日、私が見たのは私の知らない晴彦だ。けれど彼も同様に、よれよれのTシャツを着た、スツピンの私しか知らないのだ。

『勝ち目はない』

そんなふうにしてしまう自分に、何故比べる必要がある、ともう一人の自分が問う。

「あれ、またか。今度は何だ」

驚いたことに、その日も晴彦はやって来た。

「今日は彼女とあのホテルに泊まるんじゃないかったの？」

私は多分、これ以上ないというくらい不機嫌な顔をしていたはずだ。本当は安堵していたのだと思う。来ないと思っていた晴彦が、こうして現れたことが嬉しかったのだろうと思う。でも、そんなことを晴彦に悟られるわけにはいかなかったし、自分でも認めるわけにはいかなかった。要するに、パニックに陥っての仏頂面だった。

「彼女じゃないよ。そういうんじゃない」

「いいよ、言い訳しなくても。私あんたの奥さんじゃないし」

「あ、もしかして、それヤキモチか」

私をからかうその言葉に顔から火が出る思いだった。思わず、手にしていた雑巾を晴彦に投げつける。それはテーブルの上にあった陶器のカップに当たってもろともに床に落下した。気に入って使い込んでいたスペイン土産の小さなカップが粉々に割れた。

「帰ってよ。っていうか、もう来ないで」

晴彦はしばらく私を見てから、しゃがみ込んで割れたカップの破片を拾い上げた。

「今までのようには来られなくなるから、安心しろよ。ちょっと遠くへ転勤になったから」

「転勤？ どこに？」

「福井」

咄嗟にそれがどこなのか実感することができなかった。私にできたのは、実感できない

くらい遠い場所なのだという理解だ。

「今日は話があつて来たんだけど、また今度、おまえの機嫌がいいときにするよ」

晴彦は、そう言つて部屋を出て行つた。

「今度なんて、もうないからね」

閉まつた扉に向かつて、私はまだ悪態をついていた。

その日から今日でちょうど二か月が経つ。毎日、晴彦のことを考えて辿り着いた私の結論。

それは、晴彦は好きで好きでたまらない人ではないということ。けれど、いなくては困るかけえのない人だということ。

テーブルの上には、届いたばかりの晴彦からの宅配便。包みを解くと藍色の染料で絵付けされた陶器のカップがひとつ入っていた。カップの中底に貼付けられていた事務用の付箋紙を剥がして走り書きを読む。

『近くの誠照寺って寺の骨董市で見つけた。

そっくりだろ？

Love me little , Love me long.

おまえとだったら、できそうな気がする。』

カップを手にとってしげしげ眺めたけれど、割れたものとは似ても似つかない。

「バカ、全然違つよ」

近松は『曾根崎心中』の純愛を「恋の手本となりにけり」と結んだ。手本にはほど遠いけれど、私と晴彦はこれでいいのだと思う。

「もじずりの椀（わん）」

中野 純賢

放空は、鯖江の名刹・元三大師堂がんざんだいしどうの修行僧であった。今庄の山村の四男坊に生まれ、仏縁あって、十五才で慈空和尚じくうおしょうにあずけられたのである。

そんな放空も元三大師堂で仏道修行に励むこと三年、僧としても男子としても、一人前になりつつあった。

新しい年が明けて五日、今日は寒の入りである。元三大師堂では、寒中の修行として毎年、寒の入りから二月の立春まで、托鉢たくはつの修行を恒例としていた。

朝六時、元三大師堂でのお参りを終えた放空は、わらじに網代笠あじろがさをかぶり、小雪の舞う中、一人で寺を出発した。

元三大師堂のこの寒中の托鉢は、鯖江の風物になっていて、信仰の篤い人は、チリンチリンと鈴の音が聞こえると戸口に出て、放空が来るのを待っているのがあった。

「お早つございます。放空さん。今朝も冷え込みますねえ。こんなに寒いのに、ご苦労様で

す。」

と声をかけながら、紙に包んだ浄財を、放空の鉄鉢てつぱちの中へ喜捨きしやするのである。

放空は、ほほ笑みながら軽く会釈をして、経を唱えながら合掌し、また再び深く礼をして、その場を立ち去るのであった。

いつしか舞っていた小雪も止み、朝日が輝くのを放空は感じた。わずかな日の光が、放空の手足にかすかな温もりを与え、木々に積もった雪も、光り輝いていた。

放空は、一本の細い通りに出た。経を唱えチリンチリンと鈴を鳴らしながら歩を進めると、朝日の輝く方に、一人の娘が立っている。河和田塗りの塗り師、弥兵衛の娘であった。

娘は合掌して、放空の鉄鉢に静かに浄財を入れた。その手は朝日に照らされ、絹のように白く、細く、美しかった。

娘はうつ向き加減に

「ご苦労様です。」

と、つぶやくように小声を発した。

その姿に放空は、しばし心を奪われたが、いつのもように軽く会釈し、経を唱え、再び深く礼をして立ち去るのであった。

娘の名は、お里おさと。歳は十六。塗り師、弥兵衛の塗った椀に、蒔絵を施し暮らしていた。その絵は、とても十六の娘が描いたとは思えないほど、優雅で繊細であった。

放空とお里は、初対面である。放空は、修行僧という立場にありながらも、お里に一時惹かれていく自分を感じていた。

次の朝も、放空は托鉢に出た。お里のことが心に懸かっている。弥兵衛の家の前に来ると、降りしきる雪の中で、お里がたたずんでいた。

昨日、放空は、お里の顔をちらりと見ただけであったが、今日はお互い、一瞬ではあるが目を合わせた。お里はすぐに目を伏せたが、お里のふっくらとした頬は、放空に母を思い起こせるのであった。

それでも二人は、言葉を交わすことなく、ただお互い、会釈をするだけであった。

そんなことが何日も続いたが、寒の托鉢を始めて、二十一日目の朝であった。

いつものように放空がお里の家の前に来ると、お里は浄財ではなく、紺色の包みを放空の鉢の中に入れた。

放空は不思議に思い、お里の顔をじっと見ると、目に涙が浮かんでいるようであった。しかし放空には、その涙の意味を理解することはできなかった。

放空が寺に戻り、その包みをほどこいてみると、朱塗りの鮮やかな椀があった。そして椀の底には、淡いピンクのねじれたような花が一輪描かれていたが、若い放空には、その花の名前すら分からないのであった。

次の日の朝も、放空は托鉢に出かけたが、もうお里の姿はどこにもなく、二度と放空はお里

に会うことはなかつた。

放空の心は、ぽつかりと穴があいたようで至心に仏様を拜んでも、その穴を埋めることはできなかつた。

放空は己に言い聞かせた。

(いかにお里のことを好いても、自分は僧である以上、お里を幸せにすることはできない。お里のことは、一時の心の迷いであつたのだ。せめて、この椀を大事にしていこう。)

春になつたある日、放空が町に出ると、人々の噂話が耳に入った。

「弥兵衛さんの娘のお里ちゃん、大阪の大きな漆器問屋に嫁いだんだってねえ。玉の輿らしいよ。」

お里は、その器量と蒔絵のうまさを見込まれて、二月初めに上方の大店おわたなへ嫁いだのであつた。そして、誰にも知られずに、お里は放空に渡した椀と対の椀を、嫁ぎ先に持参したのである。

放空は思った。

(人の妻となつたのか。それでいい。幸せになつてくれ。)

それから数年が経ち、放空も立派な僧になつた。慈空和尚も、この放空を是非、元三大師堂の後継ぎに、と考えていた。

しかし、慈空和尚には、もう一人の弟子、慈円がいた。慈円は、自分が元三大師堂の後継ぎを、と考えていて、そのためにはどうしても放空の存在が、目の上のたんこぶであつた。

慈円は策を練った。実は慈円は、放空がこの腕を大事にしていることを知っていた。そしてそのことを、慈空和尚に告げ口したのである。

慈空和尚は、放空に問い質したが、放空は口を閉ざしたままであった。慈空和尚は「やむを得ん。女人に心を奪われている者をこの寺にとどめ置くことはできぬ。出て行くがよい。」

放空は、元三大師堂に別れを告げ、あてもなく流浪の旅に出た。が、その足は自ずと上方に向けられていた。そしてその懐中には、お里の腕があった。

上方に着くと放空は、いろんな寺で説法をした。放空の説法は評判を呼び、その名は上方中に響き渡った。放空は念じた。

(お里が私のことを聞きつけて・・・)

しかし、その願いは虚しかった。

それからどれだけの歳月が流れた頃であろうか。放空は、備中の国にあった。

初夏の頃である。小高い丘を上がっていくと粗末な草庵のような寺があった。

放空はその寺の石段に腰をおろし、遠くを見遣った。心地良い山風が、放空の耳元をかけた。

その時である。ふと足元を見ると、お里の腕に描かれている花とまさに同じ花が、放空の目に入ったのである。そしてその花は、点々と寺の庭に咲いていた。

その花の姿は、可憐で慎ましく、まるでお里のようであった。

放空は村人の許しを受け、この寺にとどまることを心に決めた。

村人の話から、この花は「もじずり」といって、恋心を忍ぶ花だということを知った。そしてこの時初めて放空は、お里の涙の意味を悟ったのである。

放空の心は穏やかであった。長い流浪の旅を続け、ようやくお里が待つ地にたどり着いたような気がしたからである。そして、この寺に骨を埋めようと決めたからである。

それから間もない頃のことである。旅の女人が息を引きとったので、寺で弔ってくれ、との知らせが入った。

放空はその女人に対し、懇ろな経を唱えた。女人は長旅のせいか、やせ衰えてはいたが、どこか品があった。

そして、女人の持っていた包みをほぐくと、朱塗りの椀があり、その椀の底に「もじずり」の花が描かれていたのである。

放空が慌てて他の荷物を調べてみると、柘植の櫛に、「越前の国、鯖江、里」ときざまれている。

(間違いない、お里だ。どうしてこんな姿に。いったい何があったのだ。)

放空の涙は止まらなかった。何という再会か。放空は、強くお里を抱き寄せた。

次の朝放空は、お里を「もじずり」の咲く庭の隅に葬った。そして二つの椀に、粥と汁物を

入れ、墓前に供えた。

離れ離れになっていた二つの椀は、ようやく一つになったのである。

風の便りに聞いたところによると、お里は主人に、その椀を大事にしている理由を問われ、答えなかったそうである。

主人は、

「他の男を心に秘めている女を、妻にしておくことはできぬ。」

とお里に去り状をつきつけた、とのことである。

それから間もなく、放空もお里に惹かれるように、息を引き取り、お里の傍に埋葬された。

今でもその寺には、「もじずりの椀」が供えられ、「もじずり」の花が静かに咲いているとのことである。

「オシドロの恋」

瀧本文絵

私の名は前田善次郎。早いものでこの春になると、古希といわれる歳を迎える。

鄙びた古家の一人暮らしは哀れに思うのか、息子夫婦も娘夫婦も一緒に住もうと言ってくれたが、今はいいと断った。別に自分がまだ若いと思っっているわけではない。一人静かにいるのがいい。妻の紀代子を失って、そう思うようになったのだ。

昭和十八年。福井県の山間に私は生まれた。そこは眼鏡や繊維、漆器作りの盛んな小さい村で、私の両親もまた繊維工場で働いていた。

まだまだ貧しい戦後の時代は道といえは小石の混じる砂や土。木枠の引き戸が玄関の古い家が多い。

「善ちゃん、政兄知らん？ 父ちゃんが探して来いって言うけど、どこもいやへんし」
漆黒のお椀を逆さにしたようなおっぱは頭の紀代子が来た。

「知らんなあ。勘次のとこちゃうか？」

私は玄関口で仁王立ちになり、腕組みをして紀代子を見下ろす。

「勘ちゃんどこ……そう、分かった」

紀代子がとぼとぼと道に戻って行った。

玄関の隅で、背中を向けてしゃがみ込んでいた政一が、振り返って手を合わせた。

「善ちゃん、すまん」

間一髪。ついほんの数秒前に「助けて」と駆け込んでいたのだ。

私は政一の横にしゃがみ、顔を覗き込んだ。

「遠慮するなつて。んで？ 今日は何？ また母ちゃんのメガネ落として割ったんか？ ばあ

ちゃんの入れ歯落として欠けたんか？」

うつむいたまま、ぼそりと答える政一。

「……父ちゃんのちゃんぼ、落とした」

「ええーっ！」

政一の父親は漆の塗師だ。漆に傷をつけ滴る樹液を、樹に取り付けたちゃんぼと呼ばれる湯呑型の器に時間をかけ採取する。それを政一はうっかりこぼし、怖くて逃げたという。

幼馴染みで同級生の政一とは、色んなことをかばい合っていたが、さすがにこれは洒落にならない。私は生気の抜けた政一の手を引き、政一の父親の元へ出頭したのであった。

「あん時は大変だったな。訳も聞かず調子に乗ってかくまった罪で、俺は親父に殴られ前歯が一本飛んだし。生えたての永久歯だぜ。罪人のお前はしばらく頬つべた両方腫れてさ、フグみたいに」

政一の結婚は意外に早く、私が羨ましさから意地悪でこの話をすると、政一は台所の嫁に聞こえぬよう奇声を発していた。

「善ちゃん、その話は勘弁」

二十歳とはいえ、もう立派な跡取り息子の政一と、その夜は随分昔の話に花が咲いた。

その時、実は紀代子も連れ帰らなかつた罰で父親に叩かれたと知った。

私は紀代子に何とも申し訳なく思った。

私が二十四歳を迎える頃、近所の世話好きなトメさんが母と上がり框で喋るうち、私と紀代子をつくついたらと言い出した。妹としか見えぬと言ったが、「そうかそうか」と嬉しそうにうなずき、さっそくその日のうちに日取りまで決めてきた。

それは、祝言を挙げた夜のこと。

「違うの。善ちゃんが嘘ついたからじゃない。善ちゃん嘘つく時腕組むから、政兄がいるってすぐわかった。ばれたらまた善ちゃんが怒られる。私が善ちゃんを好きなの知ってる父ちゃん

は、私の嘘を見抜いて怒ったの」

「え？」

布団を並べ横たわっていた紀代子が、恥ずかしそうに上布団を顔に覆いかぶせた。

「私……私、善ちゃんのこと、ずっと……」

声が震えている。

「……紀代子」

そういう私の声も震えた。

「……優しくしてね」

私の顔が火照る。

はやる鼓動を抑え私は布団をゆっくりとめくった。紀代子は一瞬身を固くしたがすぐ力を抜き、しなやかに足を伸ばした。

春まだ浅く肌寒い夜。私は紀代子と夫婦になった。

私の腕に眠る紀代子。髪を撫でるとその温もりは心地よく、私もいつしか眠りに落ちていた。

月日が経つのは早いものだ。

空襲、地震、洪水と、未曾有の時代を乗り越え、尚且つ栄えてきたこの町。道ももはや、土や砂などではない。洋風な建物が建ち並び、今や県下一、二の人口を誇る商業の町へと発展し

てきた。

町のシンボルである公園には、五月になると丘のすそ野にツツジが咲き誇り、池では水面を優雅に漂うオシドリの姿もみる。

私は紀代子と呼び続けてきたが、紀代子は私を「善ちゃん」から「お父さん」と呼び名を変え、やがて「おじいさん」と、呼ぶようになった。

あの世話好きなトメさんも、政一の祖母も父も、そして私の父もまたこの世にはなく、政一は息子夫婦と母親と三世帯で暮らし、私の母は七歳年上の私の兄が、家に引き取り面倒を見てくれた。

私たちにも色々あった。だが中でも一番の出来事。それは紀代子が倒れたことだ。

私が四十七年勤めた工場を退職した五年前、朝目覚めたその横に、紀代子の姿がなかった。

枕元にはいつも通りきちんとたたんだ着替え一式、手つかずのまま置いてあった。

私は胸騒ぎを覚えた。そういうえば昨夜遅く紀代子はトイレに行くのと降りていた。

「紀代子！」

古い小さな家に、ふたり暮らしの私たち。

私が気づかなければ紀代子は……。嫌な予感。私は慌てて階段を下りる。

恐れていたことが起こった。

「紀代子！ 紀代子！」

返事はない。触れた身体が、まるで氷のように冷たい。

紀代子は、洗面所でうつ伏せになり倒れていた。

発見は遅かったが、紀代子は一命を取り留めた。医者は左の脳の血管の一部が破裂していたと言った。

駆けつけた政一が私の姿に涙を浮かべ、「善ちゃんのせいじゃない」と、擦るように肩を優しく揉んでくれた。

子どもたちも、私を痛々しそうな目で見つめた。だが、私は自分が許せなかった。

ずっと紀代子から離れない私の身を案じ、息子たちが私を家に連れ帰ったのは、三日後のこと。二階の布団はあの時のまま。たたんだ着替えもそのままだ。

「紀代子」

ああ、もっと早くに気づいていれば。一緒に降りてやっていたら……。

右半身の麻痺は思いの外回復せず、言葉も聞き取りにくいまま三か月が過ぎた。

まだ六十過ぎの紀代子なら、このまま頑張ればきっとまた一緒に暮らせる。私は前向きに考

えられるようになっていた。

紀代子は私が帰る時「じえんしゃん、（善ちゃん）かえるん？ わらあし（私）もかえりた
い」と、駄々をこねよく泣いた。

いつも私のことを一番に考えて、わがままなど言ったことのないあの紀代子が。

「紀代子、すまん。もう少し頑張ろうな」

私は、真っ白い紀代子の髪を撫で、子どものようにすぎるその眼を愛しく見つめた。

季節が一巡した春まだ浅い三月、二度目の脳出血で紀代子は逝った。帰りたと言った家に、生きて帰ることもなく。

葬儀の席では子どもたち夫婦も、兄や母や政一たちも、私たちをオシドリ夫婦だと冷かして
いた近所の人たちもみな、紀代子の死を悼み泣いてくれた。

だが、私は泣かなかった。何だかまだ病院で、紀代子が私を待っている気がしていた。

頑張ればきつとまた一緒に暮らせる。一度ゆっくり寝れば、この悪い夢から覚めてまたあの
紀代子に会えるはずだからと。

しかしそんなことがあるはずもなく、紀代子と会えぬ現実に、打ちひしがれてゆく私。

そんな時布団の中でふと、紀代子と初めての夜を思い出した。私を好きと言った紀代子。しな
やかな足、黒髪の温もり。恋しくて恋しくて、年甲斐もなく涙がぼるぼるとこぼれた。

ああ、紀代子。紀代子。

時は無情に見えて、慈悲深いものなのかもしれない。

あれから四年。公園のツツジは先日満開を迎えた。今年も私はツツジを見に出かけた。オシドリが仲睦まじく、水面を渡っていた。

「紀代子、ほら、ツツジのいい匂いだ。この長閑な風景が、いつまでも続くといいねえ」
ポケットの写真に手をやる私。人から見れば、老人の単なる独り言に見えるだろう。

「私、善ちゃんのこと、ずっと……」

幼少より最期の日まで、まるで恋する少女のような目で、私を見つめてくれた紀代子。

今度は私。私の番だ。私は今彼女に恋をしている。焦がれても焦がれても、遠く手の届かぬ人への思いは、愛ではなく恋なのだから。

「紀代子、来年も見に来ような」

この歳で恋なんてと自分でも呆れながら、私は今日もポケットの紀代子に、ひとり語りかけている。

「たまたて箱」

関 弘子

たまたて箱をあけることにいたしました。五十年ほど、そつと心のかたすみ、その鍵をしまつて置くことで、今日までどれほ心安らかに生きてくることができましたことか……。

幼い日、父の語る「浦島太郎」の御伽噺をきくたびに、いつも、たまたて箱をあけた太郎の気持ちを考えました。

寂しかったのでしょうか……。哀しかったのでしょうか……。懐かしかったのでしょうか……。

それとも、嬉しかったのでしょうか。

そして、この私が、まさかあの方から、小さなたまたて箱をいただくとは、思いもかけぬことであり、五十年間その箱をあけずに生きてきたことは、絵本で見た浦島太郎の憔悴した顔があまりにもリアルであったことと、私の拙い人生の生きる術でございました。

それは、「恋」、いえいえ、「憧れ」……を入れた、小さなたまたて箱でございました。

私の実家は、地方の小さな町で、服の仕立屋を営んでおりました。父は幼い頃より、厳しく親方の元で修行を積んだかいあって、自分の小さな店を持つ頃には、父の仕立てた服は着心地が良いと評判になり、注文が途切れることがありませんでした。夜遅くまで家の中に母と二人でかける、ミシンの音が心地良く響いておりました。

私に、たまたま箱を下さった間部様が、はじめてお店にいらしたのは、町のあちらこちらに、満開の櫻が薄紅色に咲く頃でございました。

長く鼻唄にして下さった方のご紹介ということでお見えになりました。

三つ揃いのお洋服と眼鏡が、本当に良くお似合いの方で、凜凜しいそのお姿に、一瞬時が止まったかと思われました。

たまたま、外出していた母のかわりに、私がお茶を差し上げることになりましたが、緊張のあまり、顔をあげることもできず、只々手の震えをかくすのが、精一杯でございました。

父の仕立てました服が、大層お気に召した御様子で、その後も、数着たてつづけにご注文をいただきました。

父も大変嬉しそうに

「あんなに、三つ揃いの似合うお方は滅多にいますものではない。」

と申しながら特に念入りに仕立てているのが良くわかりました。

店の人体にかけられ、少しづつ縫いあがっていく、あの方の服を見ているだけで、私は大変

幸福でございました。いつも見慣れている、父の服とは申せ、あの方の服は全く別の世界、父によくきかされた竜宮城の王の着るふくのように、私には思われました。

間部様が我が家にお見えになって、二年目の春を迎えたある夜、父が妙に改まった顔で、私に話があると申しました。

ミシン音の響かぬ居間で、父母が神妙な顔つきで、このたび、間部様から、人を介して私を嫁にほしいとの申し出があったとの事でございました。ただ、間部様は、夏には遠く異国のイギリスという国へ、お勉強のために行かれ、当分の間はロンドンという町でお暮らしになり、しばらくの間は、日本へ戻れず私も一緒にということ、それでも良かったらというお話でした。父も母も緊張した面持ちで、私の顔を見つめておりました。

私は最初嬉しさのあまり、天にも昇る心地でしたが、これまで自分の住む町から、ほとんど離れたことがなく、海外に当たり前にゆく今とは違い、父に連れられて行った東京さえも心もとなく、わずかの滞在ですら、気が重かったことを思い返しました。

小さな田舎の町で、父母やお近くの方々の愛情に包まれて暮らす私が、間部様と御一緒とはいえ、異郷のロンドンで、生きてゆけるだろうか、不安が先立ちました。

「さくらの心次第だ・・・よく考えなさい・・・。間部様は、立派な方でいらつしやる。」

そう言つと、父はゆつくりと仕事場に戻り、母は私をそっと抱きしめて、優しくほほえむだけで、何も申しませんでした。

父のミシンの音が、いつもより静かに聴えてまいりました。

私は部屋に戻り、久しぶりに物入れから「浦島太郎」の絵本をとり出してみました。きらびやかな竜宮城が、遠いロンドンの町に思えました。

その後、一度だけ西山公園の満開の櫻のもとで、間部様にお逢いいたしました。

生成のスーツを御召しになったお姿は高貴であり眼鏡の奥の瞳は、どこまでも優しく私を見つめて下さいました。私は、只々それだけで、天にも昇る心地でございました。

間部様が、私を見そめて下さったのは、夢の中の過分な出来事、本当にそれだけで幸福でございました。この方についてゆきたいという気持ち、なかつたら嘘になってしまいます。

けれども、私は外国の言葉をしゃべることは出来ませんし、御作法も知りません。クラシック音楽も絵画もわからぬ身であり、何よりもこれまで慈しんで育ててくれた父母をおいて、外国にゆく勇氣を持つことが、どうしても出来ませんでした。最近少し腰をかがめ左足をひきながら歩く母や、持病を持つ父が薬袋を手離せずにいることも気にかかりました……。

時を置いて、お話はありがたすぎてお受けする事が出来ぬ旨を、父に伝えますと、父は目尻の皺をこの上なく細め、安堵の表情を浮かべました。それを見て、ロンドンという竜宮城へ間部様とゆけなかつたけれども、これでよかつたのだとしみじみ思いました。

間部様は、あくまで紳士としてお振舞いになり、人を介して、丁寧にお手紙と小さな木彫の小箱を下さいました。箱を持つと、かすかに小さな音がいたしました。

それが、私のたまたまて箱でございます。

間部様は、華やかなつつじの花が咲き終わる頃、ロンドンにむかわれました。立派に学問を修められ、数年後、あちらの国の奥様を迎えられたことを、人伝におきぎいたしました。

私は頂いた、たまたまて箱はあけずに、大切に大切にしまひ込み、その鍵は、心のかたすみに、そっとしまつて置きました。

そして私も人様の御紹介で、隣町の箆笥職人であつた夫と所帯を持ち、次々と四人の子供に恵まれました。何よりありがたいことに、夫も夫の両親も、私や私の子供達そして実家の父母を大切にしてくれる、心優しい方々でした。

実家の父が持病を悪化させ、余命いくばくもなく入院し看病が必要な時も夫の家族が嫌な顔ひとつせず子供達の面倒を見てくれたり、時には看病さえもかわつてくれるたびに、私はありがたくて、うれしくて涙がこぼれました。

病室で二人になつた時、父が窓の外の色づいた銀杏が、秋の風に舞い散る風景を見つめながら、呟くように申しました。

「さくら、お前には本当にすまないことをしたと申している。私達夫婦に、もう少し教養とお金があつて、さくらを教育することができたら、今頃、ロンドンで、間部様と別の人生を歩むことが、できたかもしれないのに……。夢を奪つてしまった……。」

私は父の言葉をきくと、強く首を横にふり

「父さん、何をおっしゃるのですか。私はあの家に生まれ、夫に嫁いだことを、一度も悔いたことはありません。父さんは、あんなに仕事が忙しかったのに、私が寝る前には、必ず御伽噺をきかせて下さったでしょう。私は父さんの話をききながら、幼い頃に、随分たくさんの国々を旅しましたもの……。それで充分ですよ。」

父は静かに目を閉じると小さく頷きました。そして、その五日後、眠るように静かに旅立ちました。翌年には、母も後を追うように旅立ってゆきました。最後に二人とも穏やかな笑みを浮かべておりましたことが、残された私達にとりまして、何よりの贈り物でございました。父は生前、夫のために、三つ揃いの服を数着仕立ててくれたのですが、職人である夫は、父に侘びながら、ほとんど袖を通すことがございませんでした。けれど、長男が成人式の日に、父の仕立てた服を着て、出かけてくれましたのは本当に嬉しくて、夫婦で見送りました。父が見たら、どんなに喜んだことでしょうか……。

ささやかで平凡であっても、夫と二人、人生の扉をひとつづつあけてゆきました。

時に傲慢にも、たまたま箱をあけてみたくなることもございました。黙々と仕事に励む夫の後ろ姿が、心のかたすみに置いた鍵を、奥へ奥へとおしのけてくれました。

優しかった夫の義父母を看取り、四人の子供たちも独立し、気が付きますと、またたく間に、五十年という歳月が流れておりました。

一昨日は、子供夫婦や孫たちが、総勢二十名がせいぞろいいたしまして、夫の古希のお祝い

をしてくれました。普段はお酒を飲まぬ夫が杯を重ね、満面の笑みをうかべ、上機嫌でございました。

私は夫の顔を見つめながら、ふとたまたま箱をあけてみようと思ひ立ちました。家に戻ると箆の奥にしまっておいた、たまたま箱をとり出しました。さてさて、煙とともに、何が出てまいりますことやら……。

そつとあけると、絹の袋に入った、真珠の指輪が出て参りました。西山公園で見た櫻のような淡い色をした真珠でした。けれども、五十年の間に、私の指は節樽立ち、どの指にもはまりません。私はおかしくて小さく笑いました。遠くから間部様の声が聞こえました。

「さくらの幸せが、僕の幸せであります。」

私は指輪を両手で包み、小さく呟きました。

（間部様、私はとても幸せでございます。どうか、あなた様もお幸せでありますように……。）

「赤い竜―幕末水戸天狗党異聞―」

岡部 晋一

一、越前鯖江

猪作と娘の志保がなだらかな丘を登り、畑に着くと、一人の若者が栗の木に背をもたせぐったりとしていた。猪作は恐る恐る若者に近づくと、若者はうつすらと眼を開け

「水を一杯いただけぬか」

と呟くように言った。

娘の志保は、畑の近くの川へ走り、竹筒に水を入れ、急いで戻ると、若者に水を与え、昼飯に用意して持参していた雑穀入りの握り飯を与えた。

夕刻、野良仕事を終えた猪作は若者を家に連れ帰った。見も知らぬ若者を助けようとする猪作親娘の心の底には中世以来越前の人々に受け継がれて来た仏の優しさがあった。

その夜、猪作の妻がつくった雑穀の粗末な飯と浦の漁師と野菜と交換した塩鯖の食事に若者は生気を取り戻した。

食事が終ると、若者は膝を正して丁寧な猪作に礼を言い、身分をあかした。若者の名は、水戸藩士で三百九十石取りの竹谷新一郎といい、水戸天狗党の残党だと名乗った。

一瞬、猪作夫婦は蒼ざめた。天狗党と言えば常州水戸の城下から多数の水戸藩士達が武装集団となつて一つの正義を掲げ、幕府の追討を受けながら諸藩の追討を蹴散らし、京都に向つたが越前敦賀で追討軍の軍門に降り、練倉に収容され、結果的には斬首されたという噂は、北陸各地に広まり、この鯖江の村々にも伝わつて来ていた。

竹谷新一郎は、自分の水戸出立以来の行動についても隠すことなく猪作の家族に話した。猪作夫婦は新一郎の礼儀正しい言動に安心し、心の中で（さすが御三家水戸徳川様のお侍だ）と思うようになり、十九歳の娘の志保も、二十五歳という新一郎の端正な横顔にいつしか見惚れている自分に気付き、おもわず顔を赤らめた。

二、若狭耳村河原市

御三家水戸徳川家の藩内の政治的な思想の対立から生れた天狗党は、京都の朝廷への働きかけから行動を起した。途中、幕府の追討軍と闘いながら、中仙道等を経由して越前敦賀で幕府軍に投降した。

投降した天狗党の武士たちがあまりに多数のため、追討軍は、北陸諸藩に天狗党の処刑を分担させた。竹谷新一郎は同志とともに若狭耳村河原市（現美浜町）に移送され、明日は耳川

の河原で、出張してきた小浜藩士たちによって斬刑に処せられる前夜、一団の指揮者である堤左門からそつと耳打ちされた。

「新一郎、おぬしは、今晚脱走し、越前福井藩の松平春嶽公に我等の思いを伝えよ。しかる後に自決して我等の後を追え」

新一郎は、深夜一人脱獄した。残りの天狗党の同志たちは、翌日、耳川の河原に引き出され斬首された。天狗党の武士たちは、小浜藩士に丁重に挨拶し、従容として刑に処せられた。その立派な最期に、小浜藩士たちは涙を拭い刀を振りおろした。また、見物していた耳川の村人たちも、「さすが水戸様の侍じゃ」と、合掌した。

竹谷新一郎は、必死に越前福井を目指した。峠を越え鯖江に着いた時、空腹と疲労で木陰に倒れていたところを猪作親娘に助けられた。

当時、加賀藩を中心に天狗党の残党狩りが行なわれていた。天狗党の中には、北前船に潜り込み、蝦夷地に脱出した者もいたし、北陸の山奥に隠れた者もいた。

一通り話をした後、新一郎は、明日の早朝、越前福井に向けて出て行くことを猪作に告げたが、猪作は許さなかった。理由は、新一郎の体力が衰弱していることで、猪作の心には、この若者をこれ以上危険にさらしたくないという気持があった。志保も、この若者の凜々しさにひかれていたし、この家から離したくない淡い恋情も既に心の中に定着してしまっていた。

猪作がこの若者をいとおしく思う心の背景には、遠い先祖が、ある時代には一向一揆の一員

として、ある時代には、柴田勝家の家臣として敗者の系譜に生きていることもあった。水戸天狗党は確かに敗者だ。しかし、このすがすがしい若者だけは守りたかった。勿論、猪作の妻も娘の志保も同じ心情だった。

三、信州下諏訪

その夜、新一郎は納屋にひとり寝た。窓から月が見えた。久し振りの安息だ。しかし、新一郎は、同志が無惨な最期を遂げているのに、自分だけにこの平穏な時間が許されるのが苦しかった。

特に、下諏訪で、親友山根佐平次を斬ったことが悔やまれた。

佐平次と新一郎は藩校とともに机を並べ、剣の道でもともに技を鍛え、藩主の前で試合をしたこともあった。天狗党結成以来、一つの隊を任され、二人は指揮者として各地に転戦した。しかし、下諏訪の宿場で佐平次は、宿場女郎の美雪と情が深まり、隊を脱走した。隊の上役の桜井主計は新一郎を呼びつけ、

「隊の軍律が乱れる。佐平次を斬れ」

と、新一郎に厳命した。

遊女屋の裏に、新一郎は佐平次を呼び出した。美雪も心配で佐平次について来た。「佐平次、隊に帰れ。桜井様には俺も一緒に謝罪する。帰れ！佐平次！」と迫った。しかし、佐平次は、

「俺は、もう帰らん。もう武士を捨てた。俺は遊女屋の用心棒になり下がって、この美雪と暮らす！」と、きっぱりと言った。

新一郎は刀を抜き、

「斬る！隊の軍律のために斬る。佐平次、刀を抜け！」と、迫った。

佐平次は仕方なしに刀を抜いた。しかし佐平次は、全く闘う構えを見せなかった。佐平次は叫んだ。

「新一郎！遠慮なく俺を斬れ！武士を捨てた落伍者になつた俺を斬れ！」

新一郎は刀を振り下した。佐平次は血を噴き上げ倒れた。

血刀を下げ、その場を立ち去る新一郎の背中から心突き刺す美雪の絶叫が襲った。「天狗は鬼じゃ！地獄の鬼じゃ！」新一郎は血刀をぬぐわず、夢遊病者のように歩いた。

四、常陸大洗

新一郎は、月光の射す納屋の寢床で、激しい慟哭の後、懐かしい佐平次との思い出が蘇ってきた。

ある秋晴れの朝、新一郎は佐平次と御城下から大洗の浜まで遠乗りの馬を駆けた。大洗の浜で漁師から買った鯖や秋刀魚を流木や枯木を燃やし焼き、持参した酒を酌み交しながら、水平線の彼方にある筈のアグリカやエグレスの事を語り、藩の未来を論じあった。

それも今は遠い幻のような世界になってしまった。

五、赤い竜

体力が回復してきた新一郎は、猪作一家の畑仕事を手伝うようになった。手をかけてやると作物が生き生きと成長し答えてくれる。こんな植物の懸命に生きていく姿に感動する場面は、武士の世界にはなかった。

やがて、新一郎の存在が村中の噂になった。村の若い娘たちは、畑仕事に精を出す新一郎の姿を木陰から覗き見に来るようになった。そして、長身の凛々しい新一郎の姿に見とれた。志保は、仲間の村の娘から

「あの若い衆は、何者なんじゃ」と聞かれる度に、

「おっ母が病弱のため、丸岡の親類から手伝い来てるんじゃ」と答えた。

しかし、ある日、猪作に村役人から明日、新一郎を連れて出頭するように連絡があった。

その日の夕餉の時、新一郎は、これ以上猪作たちに迷惑はかけられぬと明朝、越前福井に向って出立したいと言った。猪作は引留めはしなかった。しかし、突然に、猪作は、

「お願いがございます。わが娘志保にあなたのお種を戴きとうございます」

と、言った。志保も、顔を赤らめながら「お願いいたします」と、平伏した。新一郎はちい

さく頷いた。その夜、月光の差し込む納屋の寢床で、二人の若い男と女は、白蛇と化して明日も知らぬ生命を燃焼させた。志保の愛に満たされた小さな叫びが、母屋の猪作夫婦の耳にも届いた。

翌朝、新一郎は、志保の心尽しの弁当と武器代わりにと渡された馬占棒を持って猪作の家を出た。峠を越える迄と、少し距離を取って猪作と志保がついて来た。峠の中腹で、突然、五人の武士が現れた。二人の加賀藩士と鯖江藩士三人だった。指揮者らしい中年の加賀藩士が、「天狗党残党、水戸藩浪人竹谷新一郎だな、幕命によつて成敗する！」

と、鋭く言い放すと、五人の武士は一斉に抜刀し、若い加賀藩士が斬りかかってきた。新一郎は、馬占棒で相手の手首を打ち、相手が刀を落とすと、素早く拾い、構えながら、杉の大木を背にしなが、突然、刀を両手で自分の腹に突き刺し、大地に倒れた。若い加賀藩士が駆け寄り、腹の刀を抜き取ると、新一郎の腹から血が噴水のように青空に噴き上げた。木陰で覗き見していた志保は

「新一郎さまが、赤い竜になって天に昇つて行く！」と、絶叫して、気を失った。

後日、猪作に対しお咎めはなかった。新一郎の最期に感動した藩主の温情だった。

やがて、志保は新吾という男子を出産した。新吾は、御一新後、東京に出て陸軍に入り、日露戦争に出陣し、二〇三高地において陸軍歩兵大尉として壮烈な戦死を遂げた。鯖江の在の者

たちは、「さすが水戸武士の子よ」と、その勇敢な戦死に涙した。

「妖(あやかし)」

小山 和子

昔々のこと。河内(こうち)の村(＊)を見下ろす山の中腹に、齡(よわい)八百年とも言われる、桜の大木があったんやと。満開の花の頃はそりやあ見事で、この世のものとも思えん美しさに、何やら薄気味悪ささえ漂うせいやろうか。人の命を喰って長らえとる、という伝説(でんせつ)があつての。村人たちの多くは、決して近寄らんかったそうや。

ほやけど、そんな話におかまいのう、しょっちゅう一人で遊びに来る子供がおつた。

「華王(かおう)！」

「多恵(たえ)……また来たんか。おとっちゃんに叱(な)られるぞ」

「わち、平気や」

「親の言うこと聞かん子は、嫁のもらい手がのうなるぞ」

「わちは華王のお嫁さんになるんや、かまわん」

見目良い若者の姿をしてるけど、華王は人間と違(ちが)う。桜の妖(あやかし)やった。そうと知りつつも、

十歳の多恵は、華王をすっかり好きになってしまってたんやな。

何百年も生きた木には霊力がついて、華王のような妖が宿ることもある。ほやけど普通、妖は魂たましいみたいなもんで、実体はないし目にも見えん。華王が人の姿で現れたのは、多恵のためやった。

ある時、村の子供らが山菜採りに山へ入って、多恵だけ一人、はぐれてしまった。泣きながらさまよううちに、偶然、桜の木のそばへ来たんや。人喰いやと聞かされてた桜は恐ろしかったけど、泣き疲れ、歩き疲れた多恵は、もう動けんかった。

華王は可哀想に思うてな。慰めてやろうとしたんや。ほんで、遠い昔にっぺんだけ見た、お公家さんの姿を借りたんやと。何でも、五百年ほど前、都からこの辺りに鉾脈を探しに来た偉い人がいたそうや。そのお供ともの人らが、こんな山ん中まで、歩き回ったんやと。

「迎えが来るまで、うらが一緒にいたる。ほやから泣かんと、ここで待っときや」

多恵は初めて見るきれいなお公家さんにびっくりして、怖いのも泣くのも忘れてしまった。

「……誰？」

くるっとした目をまん丸にしてる多恵は、可愛らしかった。野ウサギみたいやな、と華王は思った。

「桜の、妖や。呼び名は、お前の村の者もんが昔、この桜に付けた『華王かおう』でええわ。ほんまは家

まで送ってやりたいけどな。うらは、この木のそばから遠くへは行かれんのや」

その頃、村では大騒ぎして多恵を探してた。日暮れ時になってようやく、こわごわ近づいてみた多恵のおとっちゃんや、桜の木の下でスヤスヤ寝てる多恵を見つけたんやと。

眠ったまま村へ帰った多恵は、夢やったんかと思つて、華王のことは誰にも言わんかった。けど、どうしても確かめたかつたもんで、一週間ほど後に、また行つてみたんや。

華王は二度と姿を見せる気はなかつた。何百年も見守つてきた山を、些細なきっかけで人間に荒らされとうなかつたんや。ほやけど、勇気を出して一人で登つてきた多恵が、途中でやつぱり恐ろしなつて半べそかきながら自分を呼ぶもんやから、ほだされてしもうてな。姿を現さんわけにいかんかつた。

ほれから多恵は時々、華王に会いに行くようになったんや。そのうち、華王の方でも多恵を心待ちにするようになった。どんな姿にでもなれる華王やつたけど、多恵が喜ぶんで、いつも最初のお公家さんの格好で現れたんやと。

多恵は百姓の生まれやつたけど、なかなかよう気のきく、賢い子やつた。山へ行く時は、用心してそうつと村を抜け出した。その頃の農家では、子供も大事な働き手やつたから、田畑の草むしりや虫追いは多恵の仕事やつた。多恵はしゃきしゃき働いて、他の子より早う終わらせ、暇を作つては華王のとこへ通うたんや。ほやから、多恵が時々どこへ行くんか、誰も知らんか

った。おとっちゃんだけは何とのう、わかってたみたいやったけどな。

華王と多恵は会うても、他愛ない話をするだけやった。それでも多恵は十分、幸せやった。

華王はいつでも、穏やかに多恵の話を聞いてくれたし、いやなことがあつて多恵が感情的になつてたら、やんわり諭なぐさしてくれたりもした。山ん中やから、時にはクマやオオカミが出たけど、華王は生き物らと話が出来てな。多恵を危ない目には遭わせんかった。

「なあ華王。ずっと一人で、淋しいことないのん？」

多恵がそう聞くと、華王は笑つた。

「淋しない。一人やないからな。山には、いっぱい生き物がおるやる。みんな仲間や。人間も、そうなんやで」

「わちらも？」

「ほうや。山が生きてるから、人も生きられる。忘れたら、あかんで」

「ふうん」

華王の話はちょっと難しかったけど、多恵は華王が喋つてるところを見るのが、好きやった。

瞬く間に年月は流れた。ほうして、出会うてから六度目の花を見ようかという頃。多恵の縁談が決まつたんや。親の言いなりに結婚するのが、当たり前やった時代や。多恵はなす術すべものうて、華王の前で泣いた。

「いやや……華王に会えんようになる、そんなん、絶対いやや！」

大人になった多恵は、人と妖が結ばれることなどあり得んと、とつくに悟ってた。それでも、離ればなれになるのは、耐えられんと思うほど辛かったんや。

華王は鳥たちから聞いて知ってた。多恵が嫁ぐのは峠一つ越えたところにある村の、裕福な家の跡取り息子やて。同じ百姓や言うても、めったにないええ話やと、多恵の家の者は大喜びしてゐるらしいってな。

「ほうや。今さら、逃げられてはかなわん。せつかく、頃合いを見て喰ってやるう思うて、てなずけておいたもんを」

驚く多恵を見た。華王の姿が恐ろしい大蛇に変わって、今にも自分を呑みこもうと迫って来るのを。慌てて逃げて行く多恵を見送って、華王は低くつぶやいた。

「多恵、幸せになるんやで」

嫁入りは、うららかに晴れた春の日のことやった。盛りを過ぎた桜はハラハラと花びらをこぼし、まるで泣いているように見えたんやと。多恵はあれから一度も華王に会いに行かんかったことを悔やんだ。ほやけど、もう遅かった。心残りに胸を痛めながら、多恵は馬の背に揺られて振り返り、振り返りして、峠を越えて行ったんや。

六年が過ぎた。華王は年々、衰弱し、桜も花をつけんようになってしまった。そんなある日、

鳥たちのお喋りから、多恵が実家に返されることを、華王は知ったんや。子供が出来んため、離縁されるんやと。

華王は考えた。放っておいても、自分の寿命はあと数年。どうせ尽きるもんなら、残った力を全部使い切つてでも、多恵を元気づけてやりたいとな。

春まだ浅く、山には花もない、寒々しい季節やった。多恵は一人で、淋しい山道を帰つて来た。嫁入りの時は大勢の人が見送つてくれ、嫁ぎ先の村でも、たいそうな歓迎やった。それが今は……。そう思うと勝手に涙が出てきた。重い足を引きずるようにして、ゆっくり歩いたせいか、とうとう日が暮れてしもうた。幸い、ちょうど満月の夜やってな。

ようやく、村を見渡せる峠のてっぺんに着いた時、多恵は、目を見張つた。まるで自分を出迎えるかのように、夜目にも白い満開の桜が、月の光を浴びて咲いてたんや。

多恵は華王の元へと急いだ。ほやけど、その姿はどこにも見えなんだ。

「華王！ わち帰ってきたんやで、顔見せて！」

「すまんなあ、多恵。うらにはもう、人間の姿になる力がない。今夜で、お別れや」

多恵にはわかつたんや。桜と共に、華王の命も終わろうとしてるんやと。多恵は涙をこぼしながら、桜の幹をぎゅっと抱きしめた。

「わちも、獣や魚を食べて生きてきた。今度はわちが、華王の命の糧になりたい……」

「何あほなことを」

「わちは、どうせ人間の子は産めん体や。華王や山の生き物のためになるんやったら、嬉しいんや」

「多恵……」

「なあ華王、お願いや。わちを、ずっと華王のそばに置いて。もう離さんといて」

まるで涙の雨のように、花びらが多恵の上に降り注いだ。多恵はうっとり微笑んで、桜の木のそばに横たわったんや。

次の朝。村人たちは、花びらに埋もれるようにして、冷とうなってる多恵を見つけた。ほして、桜も枯れてたんや。おとっちゃんは、桜が大好きやった多恵のために、その場に多恵を埋めてやったんやと。

こうして、一夜にして咲き、散った桜は、多恵と共に死んだ。ほやけどな。数年後、そこに新たな若木が芽生えて、やがてまた、見事な花を咲かせるようになったんやと。

(※) 河内（こうち）の村

現在の福井県鯖江市、上河内の辺り。

明治になるまで「上」は付けず、「河内村」と呼ばれていたそうです。

「牡丹慕情」

長谷川 勲

「坊やいくつ」牡丹さんはそう言うとききなり少年を抱き上げた。白粉と鬢付け油の匂いにとぎまぎしながら「ななつ」と答えると、「ななつなの。お名前は?」「かずきち」「かずちゃん」と頼りずりしてきたから少年は目を白黒させた。

牡丹さんは本名山田多恵、青森県弘前の女^{ひと}で28歳。昭和27年の4月に福井県のA温泉へ流れてきた芸者さんである。少年は此町の旅館「たにや」の次男谷川和吉。お披露目の挨拶に訪れた玄関先での出来事だった。牡丹さんは色白のふつくらとした美人で、たちまち売れっ子芸者になり、「たにや」にも頻繁に出入りするようになった。彼女は帳場に入るなり「かずちゃんいる?」と聞く。少年を見つけると駈けより他愛もない会話を二言三言交わしてから座敷に入るのが常だった。

牡丹さんは唄と三味線を受け持つ地方^{じかた}である。芸者さんが使う三味線は細棹^{ほそざお}だが彼女はどっしりとした太棹^{ふとざお}を使う。「津軽じや三味線は太棹なの」と言う。たしかに彼女の三味線は力感

にあふれ、情感たつぷりの唄声は客を魅了した。テンポの速い前奏の後、よく伸びる高音で唄に入る。絶妙な間合いで三味の音を入れる技は名人芸であった。弾き終えると一斉に拍手が湧き客は競って盃を勧めた。牡丹さんはとびっきりの酒豪で断ることなく次から次と盃を空けていった。彼女の酒は豪快で加えて笑い上戸だからいつも周囲を明るくさせた。ただ一度だけの悲しい酒を除いては……。

31年正月、新年の宴会での出来事だった。いつものように牡丹さんは津軽民謡を弾いていたのだが、上座の客が五木の子守唄を聞きたいと注文した。五木の子守唄は当時流行っていたのだが、宴席で披露されることはなかった。「恨み唄です。正月には相応しくありませんよ」彼女はやりわり断った。だがその男は強要した。牡丹さんは困惑の表情を浮かべ他の曲にしてはと言ったのだが、男は苛立ち、「黙って弾きやいいんだ！」と怒鳴った。座は白け、皆の視線が彼女に注がれた。牡丹さんはしばらく黙想していたが静かに弦を弾き始めた。ゆったりとした撥捌き、抑えた音にも哀しさが漂う。前奏がおわり、唄い始めた。切々と微かに声がふるえている。

「おどま盆限り盆限り 盆から先やおらんと 盆が早よ来りや 早よ戻る」間奏が入り声を強め、「おどま非人非人 あん人達や良か衆 良か衆 良か常 良か着物」牡丹さんはそこで撥を入れ、また切々と唄う。「おどんが打死んだちゆうて 誰が泣やあて 呉りゆか 裏ん松山 蝉が鳴く」座は静まり返り、三味の音と唄が交互に続く。唄い終えて最後の止撥が響いたとき

誰もがあまりの哀しい唄に言葉を失い茫然としていた。静寂が続き、やや間があつて一人が手を叩いた。それが合図のように皆が拍手した。牡丹さんは深々と頭を下げ座敷を離れた。彼女が戻ったのはそれから一時間ほど後で宴会は終わりにかけていた。それでも咎める者はおらず、「悪かったな」とあの男は声をかけ宴席を後にした。牡丹さんはひどく酔っていた。ふらつきながら誰もいない照明の消えたロビーに辿りつくくと椅子にもたれ込み泣いていた。

牡丹さんはその日からしばらく座敷を休んだ。五日後彼女は「たにや」を訪れ女将に詫びを入れ長い間話し込んでいた。女将は話を聞き終わると「忘れなさい」と言い、「明日から座敷に出るのよ」と念を押した。

翌日牡丹さんの「かずちゃんいる？」の聲が嬉しくて少年は座敷の終えるのを待っていた。「こんな遅くまで起きてちゃだめよ」と彼女は言い、うっすらと汗ばんだ頬を少年の頬に寄せてきた。甘酸っぱい体臭に白粉と酒が混ざり合った匂いは少年を興奮させ、その夜牡丹さんの夢を見た。

31年4月8日、牡丹さんは少年を伴い鯖江市の誠照寺にでかけた。誠照寺は真宗誠照寺派の本山で、この時期は境内の桜が見ごろとあつて多くの善男善女が訪れる。門徒の女将が花見を兼ねてのお参りを勧めたのである。

鯖江市の寺町に壮大な山門があり、それが誠照寺の四脚門で門をくぐると手前に鐘楼堂、満開桜に覆われた境内の正面が御影堂、左が阿弥陀堂の大伽藍である。堂内に入ると牡丹さんは

「いっしょに拝みましょう」と誘い、手を合わせて「南無阿弥陀仏」をずいぶん長い間唱えていた。ときおり聞き取れないほどの小さな声で正面に向かって語りかけていた。

お参りを済ませ桜の大樹の下を通ると路上写真屋が「写真いかがですか」と勧める。牡丹さんは恥ずかしがる少年の肩を抱き寄せ、「かずちゃん笑って」と促し写真を撮らせた。

その日から15日後の4月23日早朝、A町は大火に見舞われ温泉街は焼け野原となった。働き場を失った芸者さんたちは隣の温泉場に移り、牡丹さんも故郷弘前に近い大鰐おまわに温泉で働くことになった。独り暮らしをしているお母さんが望んだからである。彼女が此の温泉地を去る日があった。「必ず帰ってくるから」牡丹さんは車窓から手を振りながら少年に約束した。列車がホームを離れると少年は悲しくて無性に切なくて涙が止まらなかった。

一年二年と過ぎ温泉街は復興し芸者さんたちは戻ってきた。その間牡丹さんは四季折々の津軽風景と彼女の写真を添えた手紙を寄こした。少年は写真を眺めながら「ぎつと帰りますから・・・」の末文を何度も読み返していた。だが牡丹さんは帰ってこなかった。

33年10月の手紙に少年は胸騒ぎを覚えた。「芸者を退ひき母と暮らすことになりました。必ず帰ると約束したのに果たせそうもなく申しわけなく思っています」と書かれていた。

少年は大鰐おまわにに手紙を出したが返送されてきた。連絡が途絶え不安と焦りの日が続き、彼女の夢を見るようになった。牡丹さんが三味線を弾ひいている。だが音が出ない。必死に音を出そうとする牡丹さんが夢の中にいた。

34年2月11日、牡丹さんの弟さんが悲しい知らせを持って「たにや」を訪れた。

「姉は昨年の春から体調を崩していました。微熱が続き痩せてきたのです。本人は大丈夫と言っていたのですが夏になると嘔吐を繰り返し、黄疸が表れるようになりました。心配した母が弘前の病院で検査を受けさせたのです。診断は肝臓癌、しかも癌が肝臓全体に広がり手の施しようがなく、苦痛を抑える治療しかできないと告げられたのです。」

一月ほど入院していたのですが本人の希望で自宅療養にきりかえ母と暮らすようになったのです。年内は病状もさほど悪化せず体調の良い日には三味線を弾いていました。和吉さんのことも楽しそうに語っていたのです。

それが年を越してから急激に悪化し再入院しました。病院でも手立てはなく食事も水も受けつけず点滴で辛うじて生命を繋いでいる状態でした。それも長続きせず今月に入って昏睡が続き三日の未明に息を引き取りました」

少年は顔面蒼白になり震えていた。頬に幾筋もの涙を流しながら話を聞いていた。

「母は芸者で私たち姉きょうだい弟は私生児でした。父なし子と蔑まれながら暮らしていたのです。不憫に思った母は私を養子に出しましたが姉は手元において三味線と唄の稽古をつけていました。津軽で名人と称された母がその技を娘に伝えたかったのでしょうか。それは厳しい稽古で姉が泣くと、『父なし子と蔑まれて悔しくないのか。津軽一の名人になって見返すんだ！』と叱りつけていました。文字通り血の滲む稽古で姉は18歳の頃には母に劣らぬ名人になったのです。し

かし戦時中に三味線で暮らせるはずもなく、母娘は農園で働かざるを得ませんでした。

そのときに姉は農園の長男、毅さんと恋仲になったのです。彼は両親に結婚を懇願したのですが先方は大地主、許されませんでした。思いつめた二人は駆け落ちをしたのです。それも半年後には連れ戻されたのですが、姉は妊娠していました。泣々結婚は認められたのですが当然ながら祝福されませんでした。

家族親戚からは見下され、使用人からも妾の子と陰口を叩かれました。耐えていたのは生まれてくる子供を父なし子にしたいくないとの思いからです。結婚から間もなく夫が招集されました。それから間もなく19年3月男児を出産、絃一です。

その半年後に夫の戦死公報が届きました。姉は悲嘆のどん底に突き落とされ絃一を抱きながら泣いていたのです。それは舅も同じでした。舅は悲しみを孫への溺愛で埋めようと思いました。姉から赤子を取り上げ遠縁の女に世話をさせたのです。農園の後継あと継ぎにするからと言い含められて姉も泣々承諾したのです。

絃一が風邪をひきました。女がそう言ったのですが肺炎でした。肺炎と気付いた時は手遅れで、21年4月8日に幼子はわずか二歳で世を去ったのです。姉は気が狂わんばかりに泣き自分を責め、女と舅を恨み続けました。そんな姉を舅は絶縁し実家に戻したのです。

家に閉じこもり悲しみを振り払うように三味線を弾く姉ですが、その音は弱々しく哀しいものでした。一年後、やっと三味線に力強さが戻りました。悲しみを克服したのです。

姉は流れ芸者となり各地を放浪しました。貴方に逢ったとき、我が子の面影を見つけたのでしよう。姉は貴方に絃一を重ねていたのです。可能なら近くで成長を見守りたいと願っていました。その望みが叶わぬことと知ったとき、連絡を絶ちました。『やつれた姿を見せたくない。昔の私の姿であの子の記憶に残っていたい』と言っていたのです。

姉は二枚の写真をいつも枕元に置いて眺めていました。悲しさも楽しさも心に刻んで旅立ちたかったのでしよう。臨終間際のことです。姉の顔に笑みが浮かびました。楽しい思い出が心を過ったのかも知れません」

彼は二枚の写真を少年に見せた。一枚は赤子を抱く牡丹さんの写真。もう一枚は桜の下で艶やかに笑っている牡丹さんとその横ではにかみながら笑っている少年の写真だった。

■ さばえ近松文学賞2013 ～恋話 (KOIBANA) ～ ■

平成25年9月27日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版】

発行社 [DoCompany出版 \(ポポブックス\) BoboBooks](#)

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14F

TEL 050-3692-4434 FAX 03-6369-4449

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233 FAX 0776-28-5234

<http://bobobooks.com>